

# 防災情報を伝えるため、利用者に寄り添った展示づくり

—防災専門図書館の展示紹介—

## 矢野陽子

### 1. はじめに

防災専門図書館は、公益社団法人全国市有物件災害共済会が運営する図書館で、館名どおり、防災と災害関連の資料を収集している専門図書館です。1956（昭和31）年に東京都千代田区で開設し、現在では17万冊を超える資料を所蔵しています。当館では災害を「人に災いを及ぼすもの」と捉えており、自然災害、火災、交通災害、環境問題、労働問題、戦災と幅広い主題で資料を収集し、独自分類で整理しています。また、開架式のため、閲覧室にあるのは1・2年分の雑誌と約500冊の図書です。

### 2. 利用者に合わせて展示する

当館は22階建てビルの8階にあり、他のフロアには会議室・ホール・ホテル等が入っているため、当館の利用者は、調査目的で来館される方と、会議や宿泊の前後に立ち寄りの方とに大別できます。滞在時間が全く異なる両者ですが、当館としては「来館されたからには、何かしら防災情報を持ち帰っていただきたい」という思いがあるので、閲覧室にはふらりと立ち寄りの方でも読みやすい一般書や問い合わせの多いテーマの図書を排架し、また解説展示もしています。

さらに、防災に関する専門家から初心者の方まで、その習熟度もさまざまです。そのため当館の展示は、滞在時間の長短、防災の知識の多寡に関わらず、だれでも防災情報を得られる工夫をしています。それでは具体的にみていきましょう。

### 3. 常設展の展示：防災を身近に

図書館なのに常設展とは、珍しいかもしれません。当館の閲覧室には、雑誌や開架図書の排架とともに、さまざまな常設の展示物があります。

例えば、「マグニチュード」は地震情報で欠くこ

とはできませんが、なじみが薄いせい「震度」とよく混同されます。そのうえ言葉で「マグニチュードの数字が1上がると、地震のエネルギーは32倍になります」と聞いても理解しづらいと感じ、イメージしやすいように立体的に表現したのが図1です<sup>1)</sup>。制作費を抑えるため、空き箱や100円均一ショップで購入したボール・ストロー等と、奮発して購入したバランスボール（M9）で製作しました。この展示により、エネルギーの大きさの違いを強いインパクトで記憶してもらえ、さらに東日本大震災（M9.0）と、M7（阪神・淡路大震災 M7.3）やM8（関東大震災 M7.9）の球体サイズの違いから、東日本大震災が広範囲に甚大な被害を起こしたことも容易に理解してもらえます。



図1. マグニチュードの違い（立体模型）

100円均一ショップの商品を使った防災グッズの展示も人気です（図2）。2016（平成28）年度の企画展で初めて作成したところ人気を博し、他館で



図2. 100均でそろえる防災グッズ（後ろに蔵書）

も展示の参考にしてくださるほどで、今では常設展示にしています。この展示をご覧になった方が、「なんだ、100均でも防災グッズをそろえられるんだ」という気づきを得ることで、備えに対するハードルを下げ、防災を身近に感じてもらえればと思います。お持ち帰り情報として、ご自宅でグッズをそろえられるよう、リストも配布しています。もちろん関連する蔵書も傍らに排架して、グッズに興味を持った方が、蔵書をじっくり御覧いただく流れにもなっています。

その隣には災害食+トイレコーナーもあります(図3)。蔵書とともに、各社から寄贈いただいた実物の災害食・簡易トイレを展示しており、シーチキンや野菜ジュース等、普段使いの食品が災害食にも転用できること等も紹介しています。



図3. 災害食とトイレ問題は切り離せません

#### 4. 企画展の展示：防災を考えるきっかけづくり

当館では日本全国の災害の資料を収集対象としていますので、企画展テーマを発災地域に関係なく設定できます。また、企画展は、閉架書庫の蔵書を閲覧室で御覧いただく絶好の機会であり、かつプレスリリースを出すなどして、当館のPRの機会にもなっています(コロナ禍では広報中止)。

初めて開催した企画展は2014(平成26)年度の「新潟地震 発災から50年」でした。と言っても地図に被害写真を貼りこみ蔵書を展示するなど、地震の被害が分かるだけの小規模な展示でした。

しかし、当館が目指すのは、来館者の方に防災への意識を向上してもらい、身を守るための術をご自身で考えてもらうことにあります。そこで以後の展示は、災害の教訓と身を守る方法をセットにして情報を提供する内容へ展示をシフトしていきました。それに伴い展示スペースは閲覧室だけでは足りなくなり、廊下やエレベーターホールまで広がっていきます。

2017(平成29)年度開催の「首都圏水没!? ～カ

スリーン台風から70年～」企画展では、エレベーターホールに東京23区の洪水ハザードマップを貼りだしました。エレベーターの扉が開いた瞬間に、壁一面のハザードマップが目の前に広がる仕掛けです。来館者は、ここで一気に防災の世界へ入り込み、自ずと自宅や職場等のハザードを確認されます。

閲覧室では、ハザードマップの見方のポイントとなる「点ではなく面で、土地の高低差も気にして」いただくために、都内各区の荒川ハザードマップを、縮尺を合わせて印刷し貼り合わせた手製の大型展示物を展示しました。これに、準備のため視察した施設から寄贈いただいた、荒川下流の立体地図を合わせて展示しました(図4)。



図4. 蔵書・解説・ハザードマップ・立体地図を組み合わせた展示(立体地図は荒川下流河川事務所寄贈)

2018(平成30)年6月からは「震度7の連鎖：首都直下地震を考える ～福井地震から70年～」を開催。1948(昭和23)年6月28日に発災した福井地震は、当時の最大震度6を記録。直下型地震のため家屋の倒壊率が80%を超える甚大な被害となったことから、翌年「震度7」が新たに創設されました。以後、初めて適用されたのが46年後の阪神・淡路大震災。しかし、それから企画展開催までの23年間に阪神、中越、東日本大震災、熊本(前震・本震)と5回も震度7を記録しています<sup>2)</sup>。

エレベーターホールでは、都道府県別に震度5以上を記録した情報を気象庁HPから印刷・加工して展示しました(図5)。来館者の方は、すぐに気になる地域へ近づいて情報を確認されており、



図5. エレベーターホールの展示（机上はお持ち帰り資料コーナー）

地震を「我がこと」にする仕掛けが効いています。

専門的な情報の展示では、震度計測の方法が、阪神・淡路大震災の前後で異なっていることを背景色の色分けにより表現したり（図6）、一般の方向けに、東日本大震災のような大地震では震度を記録した地点が広範囲になることを、ロール状にした紙の長さで表現したこともあります（図7）。どちらも「一目でわかる」と言えるでしょう。

さらにパネル「耐震建築の歴史」（図8）では、その歴史が地震発生と耐震対策の繰り返しであったことを、上部に付した◇黄「地震」と◇青「耐震」が交互にあることで、初心者でも一目瞭然で分かるようにしています。そこから「どのような地震や耐震制度だったのだろう」と興味を持たれた方向けに、蔵書やデジタル化データを利用して被害や制度の内容を簡潔に解説し、さらに気になった方には「どうぞ蔵書をご覧ください！」といった配置になっています。

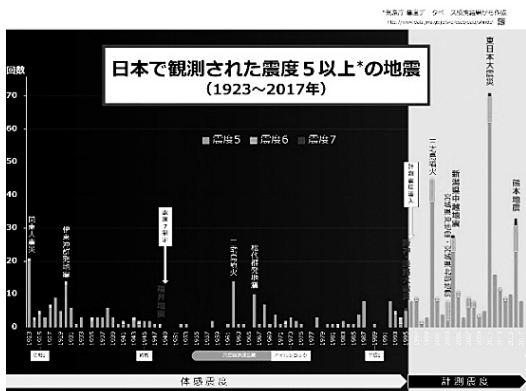


図6. 震度5以上の地震 阪神・淡路大震災後に体感震度（黒背景）から計測震度（灰背景）へ変わったことを表現。観測計器設置地点の増加により、グラフも伸びている。



図7. 震度7を記録した地震の各地の震度

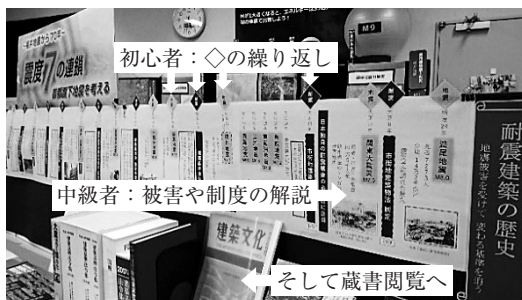


図8. 耐震建築の歴史

## 5. おわりに

2023（令和5）年9月は関東大震災発災から100年の節目を迎えます。当館では約800冊の関東大震災関連の蔵書および他機関の資料を用いて、その被害と復興、そして首都直下地震から身を守るための情報を展示するため準備を進めています。

また蔵書があってこそその展示なので、今後も怠ることなく収集し、手間と時間が掛かりますが分かりやすい展示を作成し、皆様に防災情報をお伝えしていきたいと思っています。

### 注

- 1) この立体模型のアイデアは、人と防災未来センターを視察した際の展示からいただきました。
- 2) 企画展を開催した年の9月6日に北海道胆振東部地震が発生し、6回目の震度7を記録しました。

（やの ようこ：防災専門図書館）

[NDC10：015.8 BSH：1.展示 2.防災専門図書館]